九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「近代」と「伝統」の身体技法 : 近代スポーツと伝統スポーツにおける二項対立の脱構築

岩切, 朋彦
西南学院大学大学院

https://doi.org/10.15017/2339066

出版情報：九州人類学会報. 32, pp.38-40, 2005-07-16. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

セッション B

「近代」と「伝統」の身体技法

—近代スポーツと伝統スポーツにおける二項対立の脱構築—

概　要

岩切朋彦（西南学院大学大学院）

人間の社会性を究極的に規定しているのは、主体であることと（他者の）客体であることとの両立を保証する身体である。（社会学小事典）主体と客体をつなぐ第一義的な媒介である身体には、生物学的で動物的な所作と分別された社会的、文化的なコードとも言うべき日常的所作、すなわちモースの言う身体技法としてのハビトュスが内在している。社会化、文化化過程のなかで無意識に習得、もしくは浸透されるという意味において、ブルデューのハビトュス論も身体を基本にしているが、個々の文化的再生産を持続させる上で、身体文化ほどパフォーマンスを伴って視覚的に作用する現象領域はないだろう。身体文化はブルデューによって文化資本の三つの様態とされる身体化、客体化、制度化のすべての側面から語られうる。運動のための個々の所作は、継続的な作業、すなわち文化的に構築、再生産された一定の形式の連続によって無意識的、意識的に主体に身体化される。作り上げられた主体の身体は視覚的パフォーマンスを伴って客体化され、象徴的な意味が付与されることによって、文化的再生産を持続させる要素となる。カイヨワは遊戯を自然発生的、一回的な「パイディア」と、規則をもち反復可能な「ルドゥス」とに分類したが、（カイヨワ 1970）規則と反復という一定の形式を共通言語として発展、持続させるための組織的体系的制度化は、ルドゥス的身体文化には不可欠なものである。

このように、文化資本として個々の文化再生産の一翼を担う身体文化の最たるものであるスポーツは、現在のグローバル化の流れによって、他の諸文化現象と同様に「近代」と「伝統」の狭間に揺れ、その二分法によって人類学的、社会学的な議論が行われている。植民地主義の時代を経た19世紀以降、いわゆる「近代スポーツ」は世界中に伝播した。現在我々が、そして多少誇張して言えば世界中の人々が、公共領域において「スポーツ」を語るとき、それは「近代スポーツ」のことを意味している。それは、オリンピックに代表される近代スポーツの「国際的」祭典が行われるときにもっとも顕著な形で表出する。人、金、技術、情報、思想の流動化がトランスナショナルな地平において視覚的に表象される「国際的」スポーツの祭典は、まさに近代プロジェクトの結果によるものだといえるだろう。

このように「近代スポーツの版図」が地政学的に拡大を続けるなか、主にマルクス主義史観の知識人らによって、近代スポーツは新植民地主義を想起させる文化帝国主義として批判にさらされてきた。この類の代表的な論者H・アイヒベルクは、植民地化経験が身体における異文化への隷属経験であったと主張し、近代スポーツを全人類に普遍的なものではないとして相対化している。（グットマン 1997）また、それに対してA・グットマンのように、近代スポーツを文化ヘゲモニーとして捉え、そのトランスナショナルな普遍性と、普遍の内部における諸地域のクレオール化、文脈化の過程に注目するべきだと反論する立場もある。（前掲書）こうした議論が注目をあびる背景には、最近のポストコロニアル言説に対する関心の高まりが指摘できるだろう。近代スポーツのほとんどはイギリス起源であり、版図拡大の動態は植民地主義のそれと密接に関連していた。はじめはイギリスが、そして後にはアメリカ合州国が版図拡大とともに知識と権力を資本として担ってきた近代スポーツは、現在のグローバルとローカルの権力関係を考察する上でも議論を生み出す重要な素材

となりえるだろう。

一方、その「ローカル」に位置する「伝統スポーツ」と分類される身体文化は、マージナルな現象として残存しており、自己の独自性を主張するための道具として、ホブズボゥムの言う「伝統の創造」を経験して新しく焼きなおされたり、近代的合理化によってその文化的存在を存続させたりする。前者のケースはとくにナショナリズムや戦略的本質主義によって「伝統」に価値を付与し、「近代」への対抗言説として再創造される傾向にある。石井昌幸によれば、実際、近代スポーツに対する植民地主義的支配への批判は、伝統スポーツの擁護と連動していた。(前掲書) 日本におけるその最右翼は武道、もしくは武術と呼ばれるカテゴリーの伝統スポーツだと考えることができる。たとえば柔道が近代スポーツに組み込まれたことによって、武道としての「伝統的諸価値」を失ったとする批判的言説は代表的なものであろう。また、武道の「近代とは異なった（すなわち西洋とは異なった)」身体を主張する言説も、具体的な出版物として数多く存在している。最近では、古流武術の身体技法が、近代スポーツの場で脚光を浴びるような現象も起きている。しかしながら、グローバリゼーションとナショナリズムの共存関係と同様に、これらの言説と近代スポーツのヘゲモニーは共存関係にあると言ってよいだろう。すなわち、近代スポーツという傘の下に入って、初めて伝統スポーツはカテゴリー化され、「自己」の独自性を主張することが可能になったといってもよい。したがって、この二項対立的構造を脱構築する理論的方法論がなければ、所詮は水掛け論を続けるにとどまってしまう。

本セッションでは、サッカーと合気道を二項の代表に据えて、身体をめぐるこの二項対立的構造を考察することとなった。両者の対立を脱構築するような方法論を構築するところまでは行き着かないだろうが、その一歩を踏み出すための問題提起を行うために、便宜的に以下の三つの視点を用意した。

第一の視点は、近代スポーツという傘の下での身体の主張を考察することである。近代スポーツという同一線上のフィールドにおける勝敗と競争心は、市場経済主義という近代によってもたらされた同一線上のフィールドにおけるそれと類似している。たとえば、海外の大リーグ選手がもてはやされ、そこに「日本人的価値」もしくは文化資本を基礎とした日本的身体が主張されれば、それは一時期の「日本的経済」を想起させるものとなる。この視点は近代スポーツを、文化ヘゲモニーを獲得している普遍的概念として捉え、その内部におけるナショナリスティックな競争や政治を題材にするというものである。

第二の視点は武道的身体の独自性や特殊性を考察することである。これを断言するのは若干躊躇されるが、柔道を唯一の例外として、武道はいまだ近代スポーツに外在的な存在として認識されている。すなわちいわゆる理念型としての「伝統」という明示的なタームによって統合が図られている点において、武道は「伝統スポーツ」にカテゴリー化されうるのである。そこで、武道が身体技法として近代スポーツと異なった独自の様式を持つのかという考察を、研究者個人の経験的で具体的な実践を中心に考察する。これは、近代スポーツを相対化しつつ、新たな身体文化への模索を行うような視点に基づいている。そのための勢いを得るために、研究者のまなざしは、「特殊な」身体技法の実践者として必然的に、高度に経験的で主観的なものとならざるを得ないだろう。

第三の視点は両者の視点を、武道のトランスナショナリズムに応用したものとして捉える試みとなる。武道が他の伝統スポーツと大きく異なる点は、どの種目であれ、ほぼ世界中に伝播しているか、そうでなければ視覚をともなった記号的情報化によって一定の意味が与えられているという点である。その意味において、武道は記号的、象徴的な「伝統」という特殊性を伴って、特に格闘的身体文化の分野においては一定の文化ヘゲモニーを獲得しているといえるだろう。これは近代スポーツのヘゲモニーが不可逆的であるという仮定を覆すものである。そこで、武道に独自の身体が存在することをある程度認めつつも、海外（とくに西洋圏）で武道を行っている人々が、その武道の実践を通してどのように「近代」と「伝統」の身体を記号的に差異化しているのかを分析する。

ただし、以上の視点は、あくまでも最初にセッション全体の大枠を形成した際に、コーディネーターの岩切によって作られた枠組みであることを断っておく必要がある。それぞれの視点が金（第

一)、森山（第二)、岩切（第三）の発表および報告論文の方向性に反映するように考えたものであったが、実際はこの枠組み（「近代スポーツ」対「伝統スポーツ」の対立図式も含めて）自体に両氏からの異議申し立てを受けることとなった。そこで、我々はこの枠組みに囚われることなく、むしろ発表者同士の意見や視点の「違い」を認めることで、身体をめぐる文化的状況の複雑さや困難さを強調し、提示することにした。

1. 大韓民国成立以後の韓国サッカーの展開
   —軍隊との関係を中心に—
   金明美（九州大学大学院比較社会文化学府博士課程）
2. 理想的身体技法としての武道
   —「武道・武術研究」への一視点—
   森山達矢（合氣万生道）
3. 合気道と儀礼的身体技法をめぐる「伝統」の文化政治
   —儀礼的身体技法の機能的実践とシドニーのＬ道場における「禊稽古」の政治的実践—
   岩切朋彦（西南学院大学大学院文学研究科国際文化専攻）

参考文献

アレン・グットマン　1997　『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義—』谷川ほか訳、昭和堂
R.カイヨワ　1970　『遊びと人間』清水ほか訳、岩波書店